



Title	Efficacy and safety of nedaplatin-based concurrent chemoradiotherapy for FIGO Stage IB2-IVA cervical cancer and its clinical prognostic factors
Author(s)	藤原, 聖輝
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51955
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	藤原 聖輝
論文題名 Title	Efficacy and safety of nedaplatin-based concurrent chemoradiotherapy for FIGO Stage IB2-IVA cervical cancer and its clinical prognostic factors (子宮頸癌に対するネダプラチン併用同時化学放射線療法の治療成績と臨床的予後因子の検討)
論文内容の要旨 〔目 的(Purpose)〕 局所進行子宮頸癌に対する根治治療としてシスプラチンを併用した同時化学放射線療法は標準的な治療方法として広く用いられている。しかし、本邦で開発されたプラチナ製剤であるネダプラチンを併用した同時化学放射線療法はまだ一般的には用いられていない。そこで我々はネダプラチン併用同時化学放射線療法の有用性と安全性、および予後因子に関して当院での過去の治療データを元に検討することとした。 〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 2000年から2009年にかけて当院で根治目的にネダプラチン併用同時化学放射線療法を受けた臨床病期（FIGO分類）I B2期からIVA期の子宮頸癌患者52名を対象とした。化学療法はネダプラチン 35 mg / m² / 週、放射線療法は外部照射（40-56 Gy / 20-28 fr）かつ腔内照射（13.6-28.8 Gy / 2-4 fr）もしくは組織内照射（18 Gy / 3 fr）で行った。Kaplan-Meier法で全生存率（OS）と無増悪生存率（PFS）を評価し、Cox比例ハザードモデルを用いた多変量解析を行いPFSに影響する因子を解析した。加えて、治療効果判定時、臨床上局所病変の完全寛解を診断された後に局所再発した患者に関して、ロジスティック回帰分析を行い完全寛解後の再発因子についても検討した。有害事象はCTCAE ver. 4で評価した。 観察期間中央値は52ヶ月。年齢中央値は63歳。3年OS、PFS、LCは82%、61%、80%であり、5年OS、PFS、LCは78%、57%、73%だった。多変量解析では組織型（HR 3.55, 95%CI 1.22-9.23）、腫瘍最大径（HR 4.93, 95%CI 1.60-21.72）、治療前Hb値（HR 3.22, 95%CI 1.34-8.13）がPFSに影響する因子だった。局所病変完全寛解後の再発因子としては組織型が有意（$p < 0.01$）であった。有害事象はGrade 3-4の急性期白血球減少を24名、Grade 3の晩期消化管障害を5名に認めたが、プラチナ製剤化学療法での腎機能障害は認めなかった。 〔総 括(Conclusion)〕 ネダプラチン併用同時化学放射線療法は子宮頸癌治療として治療成績はシスプラチン併用同時化学放射線療法と遜色なく有効であった。有害事象として血液毒性はシスプラチン併用時と差異はなく、特に腎機能障害が出現していない点でより安全であると考ええる。組織型や腫瘍最大径、治療前Hb値は統計学上、PFSに対する予後因子と考える。局所病変完全寛解後の再発予後因子としては組織型が腺癌であることを考える。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 藤原 聖輝

	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学教授 小川 和彦
	副 査	大阪大学教授 富山 愚幸
	副 査	大阪大学教授 猪俣 秀典

論文審査の結果の要旨

局所進行子宮頸癌に対してシスプラチン併用同時化学放射線療法は標準的な根治治療法として広く用いられているが、本邦で開発されたプラチナ製剤であるネダプラチン併用の同時化学放射線療法はまだ一般的ではない。本治療法の有用性と安全性、無増悪生存率に対する予後因子に関して当院での2000年から2009年の治療データを元に検討した。結果、3年全生存率、無増悪生存率、局所制御率はそれぞれ82%、61%、80%であり、本治療法の治療成績はシスプラチン併用と遜色なく有効であると考えられた。有害事象としての血液毒性もシスプラチン併用時と差異はなかった。一方で腎機能障害は出現しておらず、シスプラチン併用より低毒性であると考えられた。無増悪生存率に対する予後因子は組織型、腫瘍最大径、治療前Hb値であった。本研究はネダプラチン併用同時化学放射線療法が局所進行子宮頸癌根治治療法として有効性があることと、シスプラチン併用より低毒性であることを示したことより学位に値するものと認める。